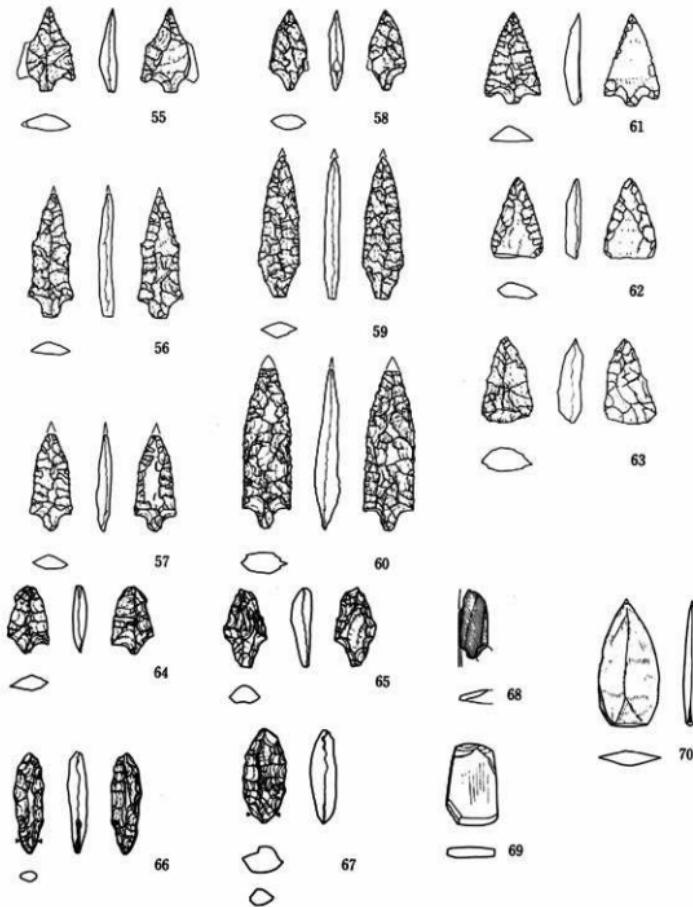


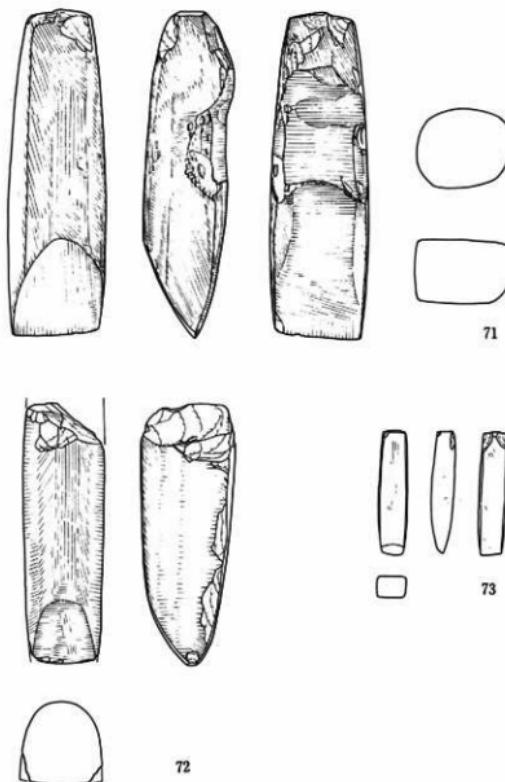
石器

石鏃 有茎五角形系は6点ある。a類(58・59)、b類(60)、c類(55・56)である。c類のうち55は上部2角の先をかなりくりこんで突出させているし、56も逆刺状に突出させている。三角形系は61で、側縁は鋸歯状をなす。無茎は三角形1点のほか、つくりの雑な63がある。



第146図 石器 (I)

- 石錐** いずれも有軸である。64・65は石錐の軸用というには形が悪い。もともと有軸用として製作されたのであろう。66・67は凸基無茎形の有軸石錐である。使用痕は上下両端にある。
- 磨製石器** 68は石剣か砲筒具の破片。70は石錐。69は周囲に研磨された面を持つ。
- 71・72は抉入柱状片刃石斧。71は、抉部のつくりは丸っぽい。72は、住居とは確定できなかったが、炭化物や灰が厚みもって面的に散布する部分から出土した。73は小形柱状片刃石斧。
- その他
(図版48)** 砧石、叩き石。83の剥離面は周囲から打撃が加えられている。しかし、石材の目の粗さからいって打製石器の用材とは考えられない。

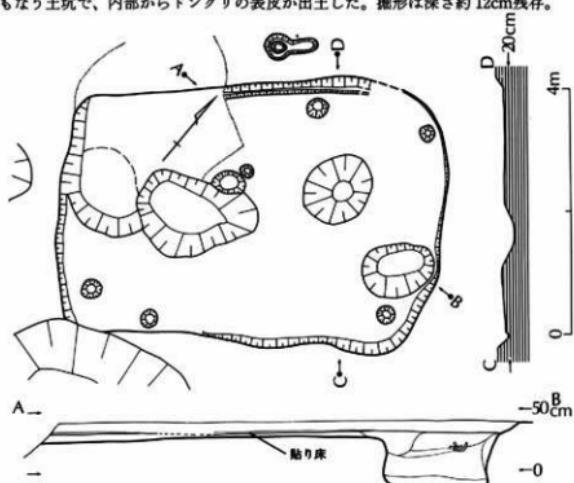


第147図 石器 (2) 71 SB71 73 SB36

III 期

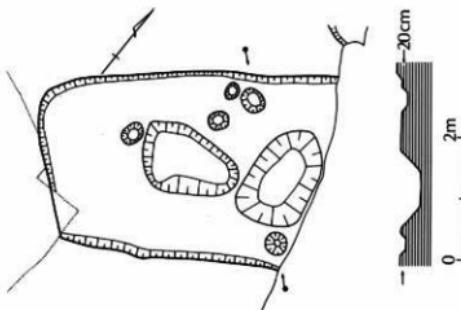
遺構

SB05
(図版7) 北東短辺のやや長い、不整な隅円長方形を呈する。長軸約620cm、短軸約410cmを測る。主柱穴は不明。周溝は北長辺に沿って部分的に検出した。貼り床がある。SK18は本住居とともになう土坑で、内部からドングリの表皮が出土した。掘形は深さ約12cm残存。



第148図 SB05プラン・セクション (1:80) 土層セクション (1:40)

SB11
(図版8・12) 長軸は500cm以上、短軸は約300cmの隅円長方形プランを呈する。掘形は深さ約10cm残存。主柱穴・周溝ははっきりしない。床面直上には多量の土器が遺存していた。

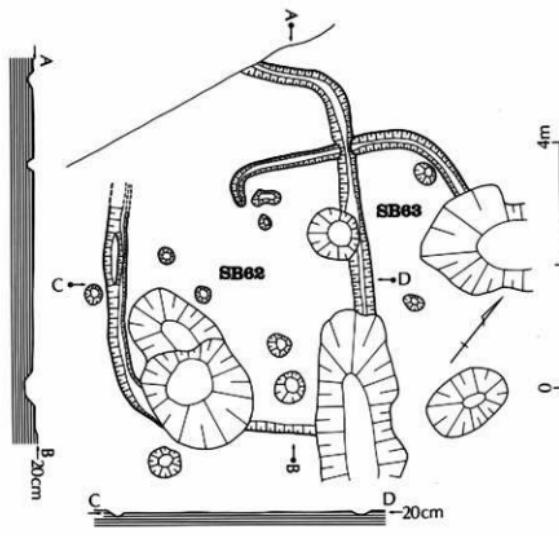


第149図 SB11プラン・セクション (1:80)

**S B34
(図版11)** 規模は不明。プランは隅円長方形のようだ。掘形は深さ約10cm 残存。床面直上には土器が遺棄されていた。

**S B40
(図版12)** 規模・プランなどはっきりしない。掘形は深さ約10cm 残存。多量に遺棄されていた土器群に混じて炭化材が認められた。土器の一部には風化したものがあり、二次火熱によるとすれば、焼失家屋であったかもしれない。多量の土器はその後の廃棄であろう。

**S B62
(図版15)** 長軸約600cm、短軸約430cm を測る、隅円長方形プランを呈する。掘形は残存せず、周溝と一部柱穴のみの検出にとどまった。

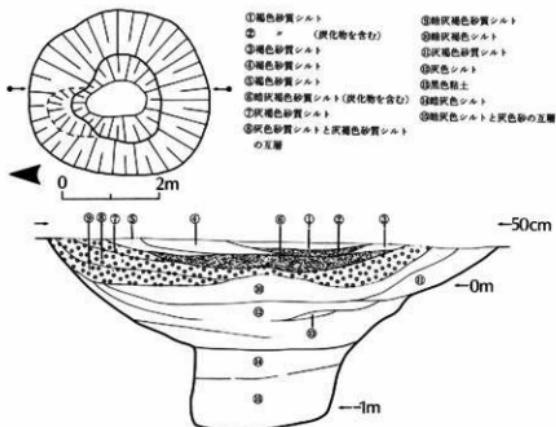


第150図 SB62プラン・セクション (1 : 80)

**S E01
(図版9)** 断面ロート状で、径約300cm の不整円形プランを呈する。深さは、皿状部分が約50cm、下部の円筒状部分が約100cm を測る。III-1期に掘削。

埋土は大きく3層に区分できる。1~6は炭化物層と黄灰色シルト層が交互に堆積し、また土器の廃棄もあり、廃棄土坑の様相を見せる(III-2期)。7~14は黄灰色シルトのブロックが混ざる層で、人為的に埋められていることがわかる。15は粗砂層からなり、下部からの吹き出しのようである。

廃棄土坑の様相を示す部分については、埋積中の窪地を廃棄用に利用したのか、あるいは再掘削して土坑にしたのかは明確にできなかった。



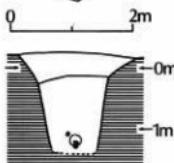
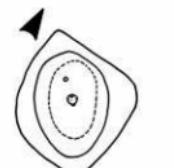
第151図 SE01プラン (1:100) 土層セクション (1:40)

S E 02
(国版9)
断面三角形で、径約170cm、深さ約130cmを測る。底面は粗砂層まで達しており、状況はSE01とおなじである。埋土も上部は人為的、下部は自然的である。

S E 03
(国版9)
上面は1辺約170cmの不整方形を呈する。
断面ロート状で、深さ約160cm。底面付近からは、細頸壺926と口頸部をいたした小型壺927が出土した。III-1期に掘削。

埋土は、最上部に炭化物を多く含んだ包含層が堆積しており、また土器も出土している。SE01と同様の様相を呈する。

S E 04
(国版10)
断面ロート状で、径約235cm、深さ約160cmを測る。埋土は、黄灰色シルトのブロックからなる上層と單一層の下層からなる。底面は粗砂層に達している。



第152図 SE02プラン・セクション (1:80)

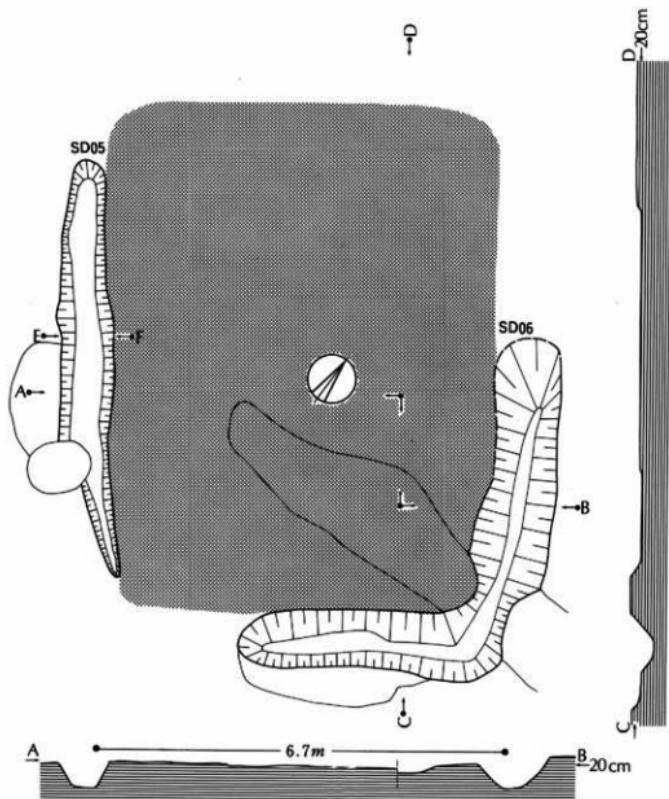
- ①暗褐色砂質シルト
- ②黄褐色シルトブロック
- ③暗褐色砂質シルト
- ④褐色シルト
- ⑤灰褐色シルト
- ⑥灰色シルト
- ⑦暗褐色砂質シルト (黄褐色)
- ⑧黄白色シルト
- ⑨暗褐色砂質シルト (黄褐色砂質)
- ⑩炭化物
- ⑪暗褐色砂質シルト (黄褐色砂質)
- ⑫暗褐色砂質シルト (黄褐色砂質)
- ⑬明灰色シルト

第153図 SE04土層セクション (1:40)

S E 06 上面は径約250cmの円形プランで、掘形の西側に幅約100cmのテラスをもつ。断面は逆台形で、深さ約110cmを測る。底面には板と木片の集積があったIII-1期に掘削。

S E 07 (図版11・12) SE06を切る。長径約180cm、短径約160cm、断面U字形で深さ約90cmを測る。埋土の断面では内部に上縁径70cm、底部径50cm、高さ約30cmの逆台形状を呈する抜き取り痕が確認でき、裏込めにはブロック状の土が詰められていた。SE06とともに底面は細砂層に達している。

S Z 01 (図版6・7) SD05とSD06で構成される方形周溝墓である。北辺の溝は未検出であるが、もともと無かったかどうかは、後世の攪乱によるところもあり、判断できない。しかし、仮にあった



第154図 SZ01プラン・セクション (1:80)

としても、溝の深さは SD05や SD06に比べて浅いものであったろう。

SD05は、幅約90cm、深さ約40cm、長さ約700cmを測る。方台部側へやや弧状をなす。

断面は、かなり立ち上がりの急な逆台形を呈する。もともと、溝幅は狭いのかもしれない。
埋土は3層に区分できる。

SD06は逆「L」字状のプランで、幅は平均100cm、深さ約50cmを測る。SD05との間は220cmほどの隙縫部となっている。

規模は、おそらく東西軸が短軸で、方台部側下端ランク間で約670cmを測る。南北軸は確たる数値はだせないけれども、900cm前後になるものと推定する。

出土遺物は、SD05から大形壺が1点出土した。ほど
んど溝底に接していたが、正立に据え置かれたもので
はなく、すでに破損した大形破片を重ねた状態に置かれていた。したがって、献供された
ものが破損したからかたずけたのか、それとも別の性格を有するのかはわからない。

The diagram shows a cross-section of a soil profile. At the top, there is a horizontal line with two labels: 'E' on the left and 'F 20cm' on the right. Below this line, the soil profile is depicted as a series of concentric semi-circles. Inside these circles, three numbered circles are positioned vertically: ① at the top, ② in the middle, and ③ at the bottom. To the right of the soil profile, there is a legend with three entries, each preceded by a small circle:

- ① 暗系褐色シルト (Dark brownish-brown loam)
- ② 暗灰褐色シルト (Dark grayish-brown loam)
- ③ 暗灰褐色シルト (Dark grayish-brown loam)

S 202 SD08を1条検出しただけである。本来ならこれだけで方形周溝墓と断定るのは早計のところであるが、溝底から完全な形に復元できる土器が幾つか出土したこと、体部下間に焼成後穿孔の施された壺が出土していることなどから、方形周溝墓の溝の一部であると認定した。

とくに、当地方においてこれまでのところ、祭祀土坑といわれるような、儀礼的行為に関係すると思われる土器の出土状況が土坑や溝に伴った例は単独で検出されていないので、類似した在り方は方形周溝墓以外に思いつかないからである。

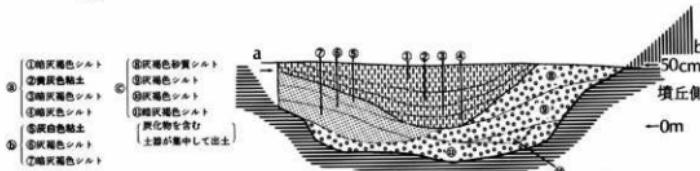
SD08は、断面逆台形を呈し、幅約300cm、深さ約80cmを測る。

埋土は大きく3層に分かれる。埋積土の色調は全体に褐色系であり、同時期の他の遺構に比べると、例えば環濠であるSD01やSD02などの上部に堆積している層位に近いという特徴がある。時期的に下がるのであろう。

④は方台部側から流れ込んでおり、墳丘?の崩落土であろう。土器はこの層位最下部からの出土である。

⑥は外側からの流れ込みである。

④は周期的には弥生時代以降の埋積土であり、環濠の上部を覆っている埋積土と共通する。



第156図 SZ02 (SD08) 土層断面図 (1 : 40)

SZ03 (図版13・14) SD14・15・16の3条を検出した。西溝は未検出である。

SD14は、幅約160cm、深さ約50cm、長さ800cmを検出した。断面は逆台形で下場の幅は平均50cmであるが、陸橋部付近ではやや幅が広くなっている。方台部側の下場ラインは直線的である。

SD15は、幅約200cm、深さ約50cm、長さ960cmを検出した。断面は逆台形で下端の幅は平均1mである。下端ラインは方台部側が直線的で、外側は蛇行している。

SD16はほんの一部分の検出であり、全体は不明である。深さは60cmを測る。プランに關しては全体の調査ができていないのでわからない。

SD14とSD15の間には約50cmの陸橋部が存在するけれども、もともとの墳丘面が確認できない以上規模について確定なことはいえない。しかし、溝の下端ラインは、方台部側と外側で明らかに相違があり、規模復元の目安として墳丘裾となる方台部側下端ライン間の距離が有意であると考える。測定値はSD14とSD16の南北軸で約1360cmとなる。

出土遺物は、SD14は溝上半部から1個体分が潰れた状態で何点か出土した他、破片も多数ある。

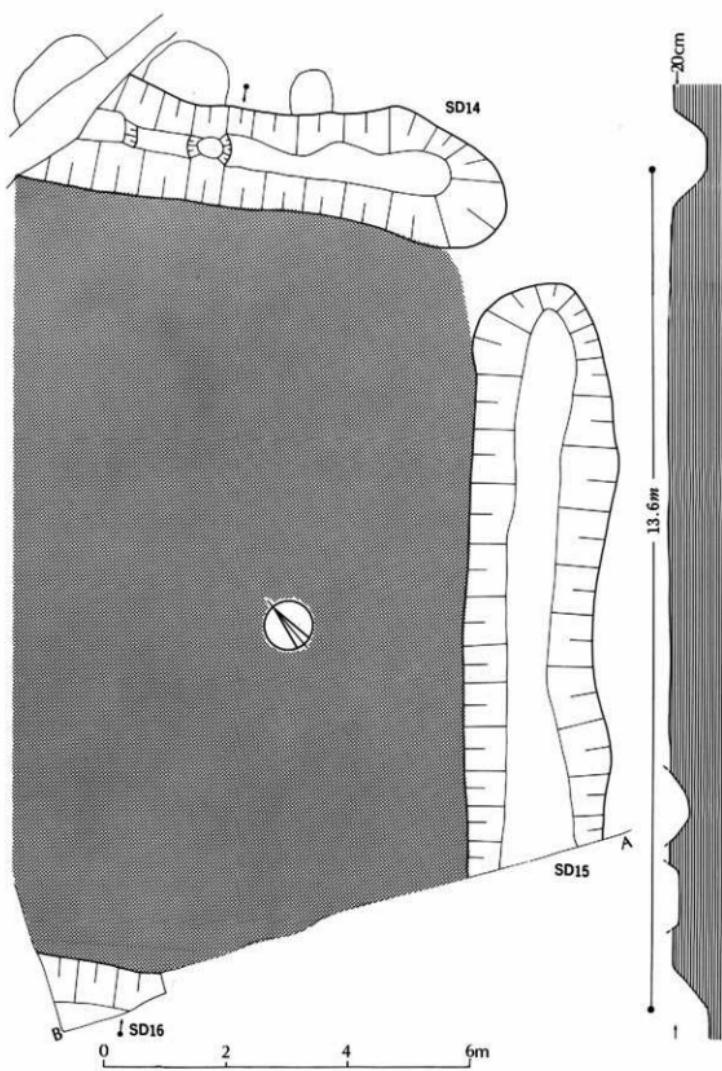
SD15も溝上半部からの出土であったが、SD14とは異なり破片が多かった。また磨製石剣(112)の破片が出土している。

これら遺物群は、ほとんどが溝上半部の出土であり、完全に復元できるものも上下逆転して潰れているので、墳丘上から転落したものと考えられる。したがって、溝内部での献供行為はなかったものと推定する。しかし、破片も含めてすべてが墳丘上で献供されたものかは確定できない。壺など復元不能なものは周溝への廻棄であった可能性もある。

この廻棄に関しては、それをすべてなんらかの形で方形周溝墓葬に伴ったものであるというつもりはない。単純な廻棄が含まれている可能性が排除できないからである。

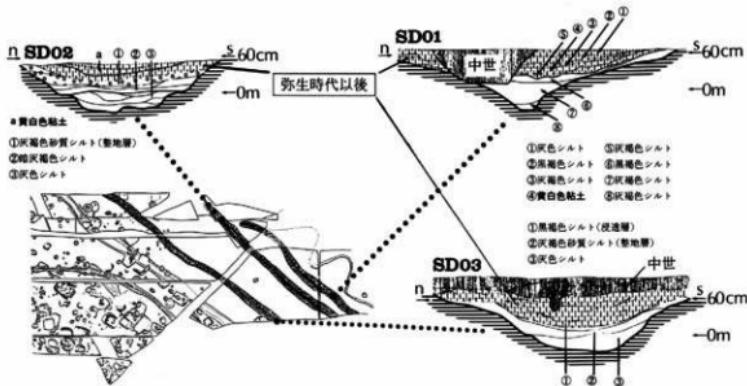


第157図 SZ03土層セクション (1:80)



第158図 SZ03プラン・セクション (1:80)

- S D01** 規模は幅200~400cm、深さ80~120cmの、やや蛇行するプランの溝。断面は、スリバチ状に傾斜する壁面が下部でさらに一段箱掘りされている。底面の幅は25cm程度と狭い。
調査区内で検出した45mほどは底面の標高にばらつきがあり、西端と東端が-15cmと浅く、それ以外は平均して-35cmであるが、西端手前のカーブした部分では-45cmと深くなっている。
埋土は、下層は灰褐色系統のシルトで、上層は黄白色粘土層を含む弥生時代以降の堆積層が覆う。III-1期の土器廃棄が行なわれている。
- S D02** 規模は幅340~400cm、深さは平均120cm(底面標高は-36~-55cm)の、ほぼ直線的に延びる溝である。SD01がカーブして対向する部分は幅420cmと少し広くなっている。断面は、逆台形を呈し、下部にはSD01のような箱掘り部分が認められる。また、土層セクションでは溝の再掘削が確認できている。III-1期の土器廃棄が行なわれている。
埋土は、下層の灰褐色系統のシルトと上層の黄白色粘土層をまじえる褐色シルトの間に灰褐色砂質シルトが堆積しており、ある時期に整地された可能性を示す。
- S D03** 規模は幅平均300cm、深さ120~130cm(底面の標高は-55~-65cm)で、SD02に平行して走る。断面は逆台形で、下部に箱掘り部分は認められない。
埋土はSD02に類似しており、中層に灰褐色砂質シルトの堆積がみられた。溝内に廃棄された土器群はこの灰褐色砂質シルトに覆われており、廃棄の過程において堆積したものと推定する。III-1期~2期の土器廃棄が行なわれている。
この整地層の可能性のある堆積層の由来については、内部に土器などの遺物があまり含まれていないことから包含層を削ったものとは考えられない。SD01にみられないことも考え合せると、SD02・03間にあった土(例えば土壠状の高まり)を削ったものかもしれない。



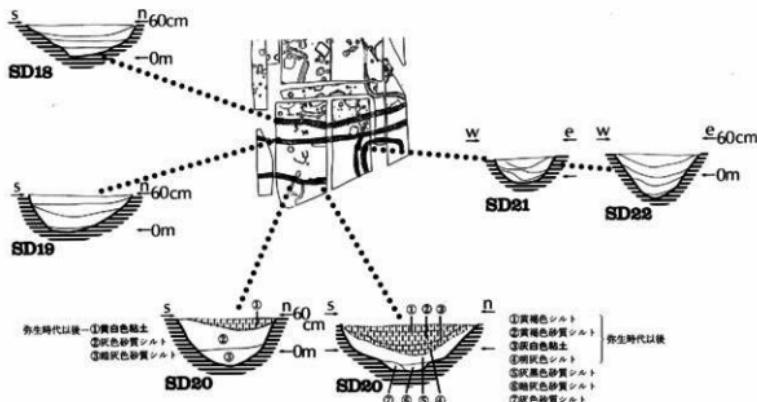
第159図 環濠土層セクション (1:80)

※ n : 北 s : 南

- S D18** 規模は幅平均200cm、深さは60cm(底面標高は5~15cm)と浅い。断面は逆台形を呈する。埋土は灰褐色砂質シルト層からなる。III-1期の土器廃棄が行われている。
- S D19** 規模は幅平均200cm、深さは60cm(底面標高は-5~-10cm)と浅い。断面は逆台形を呈する。埋土は灰褐色砂質シルト層からなる。主にIII-1期の土器廃棄が行われている。
- S D20** 規模は幅平均200cm、深さは80cm(底面標高は-10~-20cm)とやや深い。断面はU字形に近いが、東端付近では下部が一段階掘り立つ所が深くなっている。溝は東隣の調査区(591区)へ続いているので、両調査区の境界あたりで終息していると思われる。
- 埋土は、上層を黄白色粘土層をまじえる弥生時代以降の堆積層が覆っている。この層は西から東へ厚くなる。こうしたことに関連してか、この溝のみIII-2期以後の土器廃棄が行われておりIV期の土器もかなり下部からも出土している。
- S D21** SD19から派生するやや規模の小さい溝。南端は不明だが、谷Aに接続するならSD19の排水路の可能性も生じる。
- S D22** 規模はSD19と同程度。調査上の制約から全形を明らかにするには至らなかったが、方形にめぐる可能性もある。このSD22で囲まれた部分は、環郭集落の外郭を構成する方形区画遺構(S X15)として認定した。東西幅は約15cmを測る。

SD18~SD20の溝3条は、上部がかなり削平されているようで、本来の形状を把握することは難しい。だが、幸いなことに底面はそうした影響を受けてはいない。

溝の底面標高は3条の溝とも同じではなく、南から北へいくにしたがって高くなる。溝の規模が大差ないものであったとするなら、地表面標高が北へ上昇することを示唆すると考えられる。とくに、南に谷Aがひかえていることを考慮するなら、この地区は全体に南へ傾斜していた可能性が高いのである。



第160図 環濠土層セクション (1:80) 他

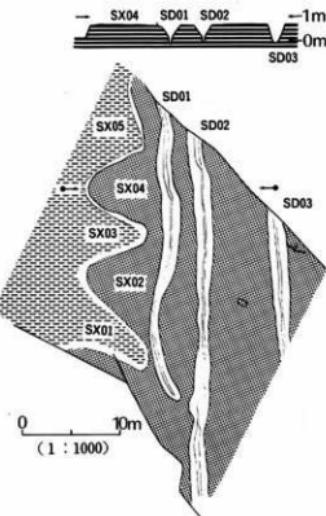
* n : 北 s : 南 w : 西 e : 東

S X01 SD01のすぐ北には比高約50cmの段差がある。段差は蛇行して突出部(SX02-SX04)と湾入部をつくっている。東部は段差がSD01に平行するので、こうした部分もそれほど長いものではないようだ。あるいはこれらが1組の単位としていくつか点在するのかもしれない。

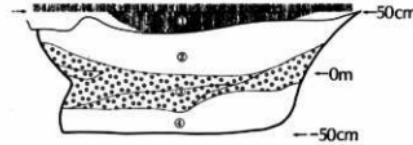
突出部のうち全体を検出できたSX04は、ヨコ約1600cm、タテ約1200cmを測る。両端基部(湾入部の先端)とSD01の間隔は約300cmを測る。突出部は検出時には上面がほぼ平坦であったけれども、すでに中世の削平をうけており、本来の構造は不明である。しかし、段差の斜面はかなり急傾斜につくられているので、さらに高ければ溝の壁面と同じ効果を有したものと考えられる。

S X13
(図版11)
S K01
(図版6)

確実墓遺構であるとは言えないが、土器の組み合わせから土器棺の可能性がある。居住域の外で検出した土坑である。プランは1辺250cm程度の隅円方形で深さは約100cmを測る。底面は平坦でスキ身の未完成のような木器が出土した。埋土は中層に灰褐色シルトが堆積し、状況はSD02やSD03とよく似ている。上層には幼生時代以降の堆積層である暗褐色シルト層が覆っており、一定期間窪地状をなしていたことがうかがえる。



第161図　突出部および環濠プラン（1：1000）
セクション（1：200）



第162図　SK01土層セクション（1：40）

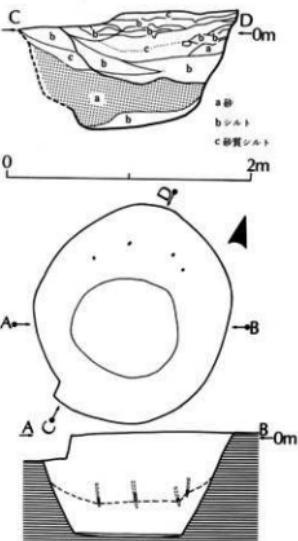
**SK23
(図版9)** 直径約160cm、深さ約40cmの断面逆台形を呈する土坑である。埋土はもっぱら砂層からなる下層と細かい堆積層に分かれる上層に区分できる。

壁面は、SD04との重複箇所で径2~3cmの細い杭を打ち込んで擁壁とした部分があった。

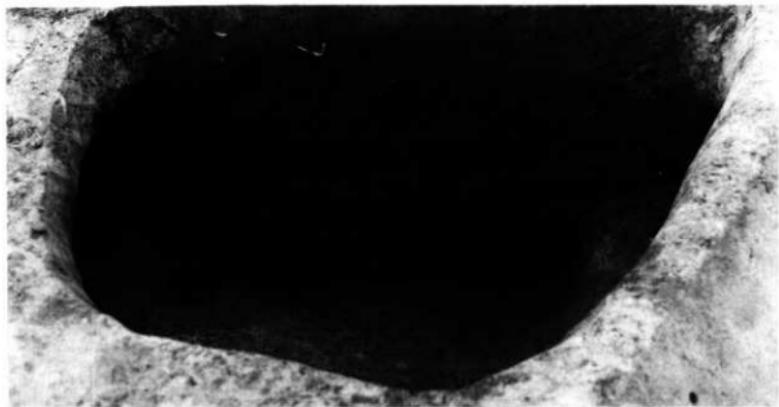
出土遺物は、土器が下層と上層からそれぞれまとまって出土している。

土坑にはI期のところで区分した類型がそのままあてはまる。下の写真はC類の典型として提示したSK251である。炭化物・灰・焼土が規則的に堆積を繰り返している。この土坑の場合には黄灰色シルト層の堆積がなく連続的に廃棄が行われたようである。とくに、各層がブロック状ではなく薄い層の綱状堆積である点は廃棄のあと土坑内部でならしが行われたのであろうか。

この他、III期の土坑には土器の廃棄されたものが以前に比べてやや多く認められた点が指摘できる。



第163図 SK23土層セクション・プラン・セクション



第164図 SK251土層セクション写真

〈囲郭集落〉とその後

- 環濠** 居住域外縁部を平行して取り巻く溝は、間隔が北と南で異なるがいちらう同時存在を前提として、基本となるSD02—SD18、SD03—SD19という関係と、断続するかもしれないSD01—SD02という関係が想定できる。そして、それら3本は溝底部の標高が一定でなく、傾斜も一定方向でないので、湛水することはあっても水路的な役割はなかったと考えられる。この点で、SD22の西を南北に平行するSD21はSD19に接続しているので一見排水路的な役割が想定できそうであるが、調査担当者によれば両造構は切り合い関係にあるとのことであり、同時存在を証明できない以上排水路としての性格は除外される。SD20は溝の東端部へ下降しているのでそのまま谷Aに接続する雰囲気を見せている。しかし、これも埋土が特徴的であって端部の確認を誤ることはないと想われる所以、排水路としての性格は除外される。ただし、この部分の旧地表面が北から南へ傾斜していたような形跡がSD18・19・20 3条の溝底面レベルの変化から伺えるので、仮に谷Aに対してSD20東端部が開放していくなくても、オーバーフローするかたちでの排出および浸透による湛水の解消はあったかもしれない。いずれにしても、これらの溝に特に排水機能は想定できない。
- 土壌** 溝の埋没状況からみると、外郭外縁のSD01—SD20は自然埋没を呈しているのに対し、基本となるSD02—SD18、SD03—SD19は廃棄された土器群とは別に人為的な堆積層（整地層）が観察できた。この堆積層の由来によっては近接して土壌が存在した可能性が浮上するけれども、鎌倉・室町時代末の削平が大きく影響しているので今回の調査では明らかにならなかった。しかし、SD01・SD02間は通路的な役割が想定できることを重視するならSD02・SD03の南側に、SD18・SD19の場合はその間およびSD18の北側に存在した可能性はある。
- 環濠の消長** 溝の掘削と廃棄・埋没の順序は、掘削はほぼ同時（恐らくII期末）に位置付けられるが、埋没に関しては居住域との位置関係もあって若干のズレを見込まなければならない。総じて言えるのは、溝の埋没は一定期間の自然堆積を経たうえで人為堆積が行われていることである。つまり、環濠掘削後ある期間は環濠の維持管理は行われたかもしれないが、それほど時を置かず機能を喪失して後は廃棄の場に転用され、基本濠に関しては整地も行われたようである。埋没の順序は南のSD18・19が早くIII-1期に埋没するが、北のSD3はIII-2期まで廃棄が継続されている。南の埋没がなぜ北より早いのかは、谷Aの平坦化と関係があるかもしれない。それに対し、北は突出部以北において湿地的な状態が以降も長期にわたって続くようであり、そのことが特に溝の整地と平坦化を促すことにならなかつたのかもしれない。
- 居住域の縮小** III期の環濠埋没は、しかし居住域の拡大を意味していない。新しい生活様式としての井戸の廃絶がIII-1期にすでに始まっていることを重視するなら、環濠廃絶後の集落は極めて浮動的であったといえる。あるいは、集落の連続性は一旦途絶えたかもしれない。

遺物

土器

S B05 858は甕 Wa。口唇部にはハケメ工具

刻み。

体部外面の調整はまず細かいハケメ調整が左下がりに施され、その後タタキ調整が下から上に施され、最後に粗いハケメを上下から分けて施す。口縁部にはタタキ痕が及んでいないので、タタキ調整は口縁部成形後に行われているようだ。

口縁部は粘土紐を附加して成形しているため、体部から続く左上がりの一
次調整の細かいハケメは口縁部の中ほどで消えている。口縁部に観察できる右上がりのハケメは口縁部成形時ものであろう。

体部内面は下半にケズリが施されている。

859は焼成前穿孔の有孔土器。W系
統。

860はA系統台付甕。脚台部は内壁気味である。

S B11 III-3期。861~869はW系統。861は口縁部が小さく受口状をなす短頸甕。頸部は押し引き状の簾状紋、以下には櫛目種(2・3・2)直線紋と波状紋。その上に縦位に磨消線3条。

862は台付円窓付甕。口縁部には2条沈線後に回転ヨコナデ、体部は外間にケズリをそのまま残す。口縁部と脚端部には回転ヨコナデ。端面は微妙に凹面をなす。

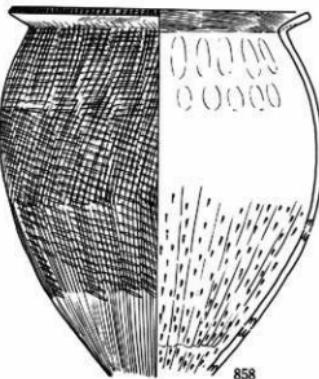
863~865は高杯 Wb。口唇部に沈線を施した後回転ヨコナデを加える例と波状紋を施すものがある。

866は高杯 Wc。口縁部に3条沈線後に回転ヨコナデ、この下に櫛というよりハケメ工具に近い原体で右下がりに連続圧痕と左下がりの押し引き紋(→方向)を施す。867は高杯脚部。沈線と鋭い切り込み状の斜格子紋、円孔列を施す。脚台の端部は回転ヨコナデが施され、端面には凹線を残す。脚台端部の形状や内面のケズリは珍しい。

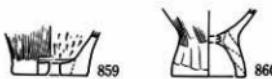
869は台付甕 Wb。やや外反気味の立ち上がりで、内面にはユビオサエ痕を残す。

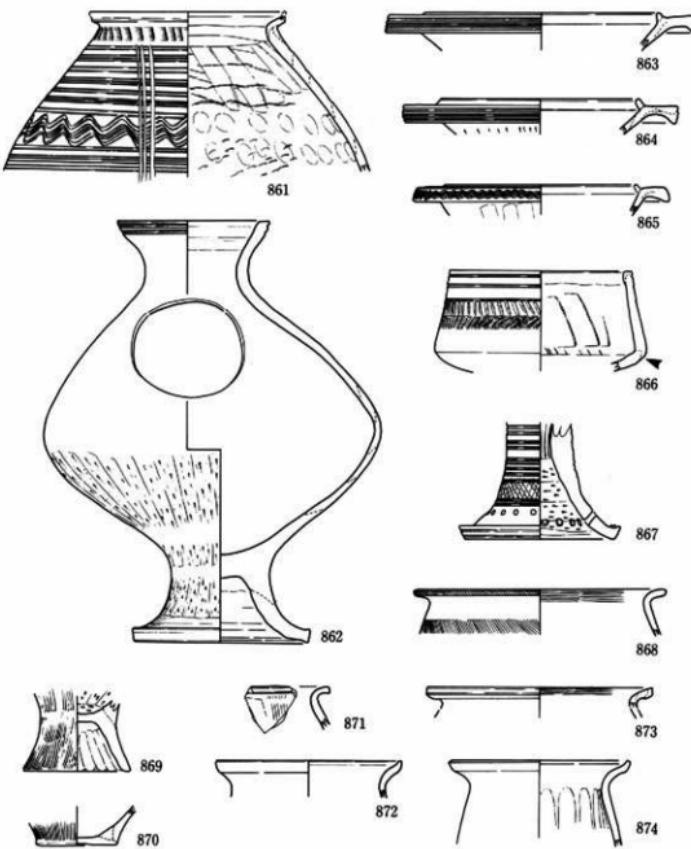
870は甕 W。底部成形はd。

871・873は口縁部に回転ヨコナデが施され口唇部は凹面をなす。



第165図 SB05出土土器





第166図 SB11出土土器

873・874は口縁部が受口状をなす。調整はナデを基本とするようだ。

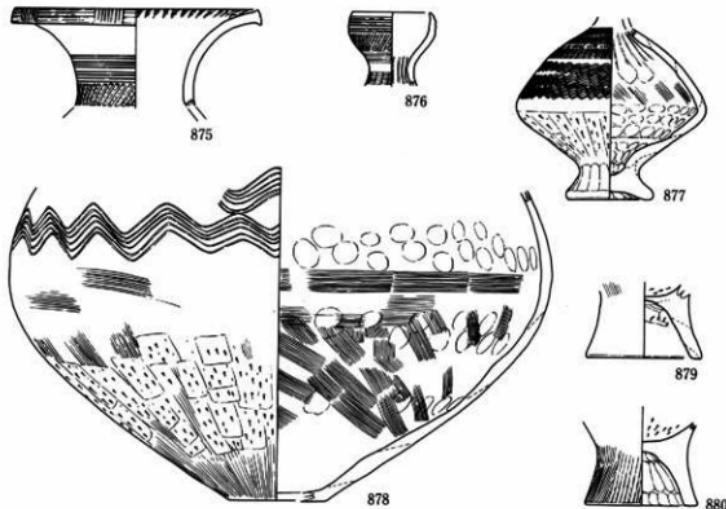
SB34 III—3期。875～880はW系統。875は太頸壺 Wa。口唇部が上下に小さく拡張され、口縁部内面には扇形紋と小さな瘤状突起、口唇部は回転ヨコナデで凹線を残し、その上を櫛で縱位に切られる。頸部にはハケメ工具の連続圧痕。

876は細頸壺 Wa。口縁部は3条沈線後に回転ヨコナデ。以下には櫛の押し引き紋(→方向)2段、直線紋、簾状紋と続く。

877は876と同一個体か。台付壺。体部上半には簾状紋2段→扇形紋1段→簾状紋1段→波状紋3段という順序で施紋(←方向)され、下半はケズリを残す。

878は壺の体部で、上半に波状紋、下半はケズリを残す。

879・880は台付壺 Wb。880は脚部内面にユビオサエ痕を残す



第167図 SB34出土土器

S B40 III—3期 893～896・904以外はW系統。881は器高約90cmの大形壺。形態は細頸壺 Waを大形化したもの。口縁部は、8条沈線後に回転ヨコナデ、それを縦位に櫛で切る。その下は櫛押し引き4段→直線紋。頸部は、断面三角形の貼付突帯4条→突帯間に管状工具で刺突紋→縦位に粘土紐を3条1単位で複数箇所に垂下させる。体部は、直線紋と波状紋を反復した後、管状工具で縦位分割と横位に刺突列。その下は斜格子紋と直線紋の反復。

882は太頸壺 Waを小さくした形。口縁部内面に扇形紋、口唇部には波状紋、頸部以下は直線紋→簾状紋→直線紋→波状紋→直線紋→扇形紋→斜格子紋。

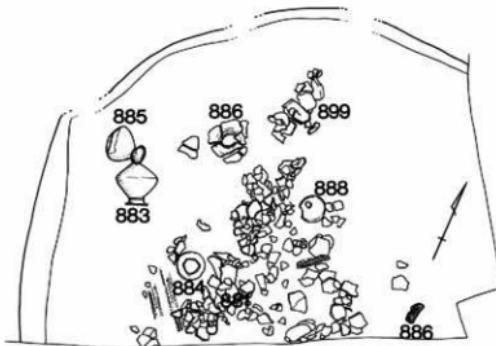
883は太頸壺 Wa。口頸部以外全面研磨の壺。口縁部や頸部の突起部分は回転ヨコナデが施されている。

884は太頸壺 Wb。口縁部に3条沈線後に回転ヨコナデ。頸部にはハケメ工具の連続圧痕が施されている。

885は形態的には細頸壺 Wb系。口縁部は3条沈線後に回転ヨコナデ。頸部は簾状紋以下直線紋→波状紋を反復して波状紋2段。体部下半は条線を明瞭に残さない板ナデ。体部内面上半はユビオサニ痕を顕著に残す。

886は881よりはやや小振りで同形の大形壺。口縁部は5条沈線後に回転ヨコナデ、それを縦位に櫛で切る。その下はハケメ工具の連続圧痕を羽状に2段。以下直線紋。頸部は断面三角形の貼付突帯3条。体部は直線紋、波状紋が施される。

887は頸部に3条沈線を施すだけで体部無紋の細頸壺 Wb。



第168図 SB40土器出土状態（1：40）